

親鸞に出会う
ことば

寺川俊昭

はじめに

親鸞のことばは、

現代人であれば知っていなければならぬのだ。

かつての日、あの鈴木大拙先生はこう語られました。現代という、生きることが容易ではないこの時代にあつて、いただいた「いのち」を真剣に生きようとするならば、親鸞聖人のことばは、なくてはならない「真理の一言」なのだ。親鸞聖人に対する大きな尊敬と信頼を、鈴木大拙先生はこのこと

ばに託して表明なさつたに違いありません。

その親鸞聖人のことばの中から、そのことばにふれて大きな感動をおぼえ、あるいは深い感銘かんとくをうけて、今もなお心にひびき続けることばを選んで、この本にまとめました。できるならば声に出して読み、聖人の語りかけを身をもって聞きたいと願つたからです。

ここに集めた親鸞聖人のことばに耳をかたむけて、私はあらためて人生に「教え」をもつことの大切さを思います。そして聖人が仏法から学び取られた深い信心の智慧を、おらかな念仏の信念を、そしてまたその信念が生み出す力強い生き方を、心して私もまた聞き取り、学び取っていきたく願います。

親鸞聖人が語られたことばを直接伝えているのは、『歎異抄』だけです。それも七百年前の鎌倉時代の、古いことばです。それ以外はすべて、聖人がお書きになったお聖教から選び出しました。止むを得ないことですが、とても硬いことばという印象をうけます。しかしながら私たちが本当に「親鸞聖人に会いたい」と願うのであれば、ことばが硬いとかやわらかいとかをこえて、親鸞聖人が直接筆をとり、姿勢を正して書きしるされた端正で力のこもった文章により、それをとおして聖人にふれることは、とても大切な道であると信じます。ですから丁寧に読むとともに、ぜひ声に出して読んで、直接に聖人の語りかけにふれる工夫を大切にしたいと、念じます。

親鸞聖人のことばと、その意識・解説を一組にしたこの文章は、真宗大谷派の出版部から刊行されている『同朋』誌に、「親鸞に出会う」という見出しで、三年間にわたって掲載されたものです。その中からあらためて三十一の法語を選んで、一冊にまとめました。毎日一文ずつ、たとえば家庭での勤行などの折に、皆がうちそろって読誦するための便宜を考えたからであります。

親鸞聖人のことばが、私たちの毎日の生活の中で、いきいきとそして大切に語られ合い、私たちの人生の道しるべとなり世の光となりますよう、心から願って止まないことでもあります。

はじめに

一日 真実の教……………010

二日 如来世に出でたまう……………014

三日 この行につかえよ……………018

四日 ひたむきな聞法……………022

五日 よき人との出遇い……………026

六日 仏法のはるかな歴史……………030

七日 仏法へのめざめ ― 回心 ―……………034

八日 回心にはじまる人生……………038

九日 本願の恩徳……………042

十日 おおらかな念仏……………046

十一日 名号不思議 ― 涅槃への道 ―……………050

十二日 念仏のみぞまこと……………054

十三日 無碍の一道……………058

十四日 信心 ― 浄土を感じる心 ―……………062

十五日 大悲無倦常照我……………066

十六日 念仏申さんとおもいたつ心……………070

十七日 信心を要とする……………074

十八日 聖人の常の仰せ……………078

十九日 往生……………082

二十日 現生正定聚……………086

二十一日 往生をとげる人 ― 悪人正因 ―……………090

二十二日 本願に救われるもの……………094

二十三日	往生を願うしるし	098
二十四日	信心の利益 — 現生十種の益 —	102
二十五日	真宗の大綱 — 本願の白覚道 —	106
二十六日	涅槃道に立つ	110
二十七日	真の仏弟子	114
二十八日	同朋 — 弟子二人もたず —	118
二十九日	愚禿の名のり — 流罪の証言 —	122
三十日	聖人の入滅	126
三十一日	聖人の覚悟 — 持言と遺言 —	130

あとがき

親鸞に出会うことば

それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施するごとをいたす。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。

【意訳】

あきらかに、真実の教をあらわすならば、『大無量寿経』こそがそれであります。

この経の大意は、阿弥陀如来が世に超えた誓願をおこして、如来の世界をいのちあるものに広く開き、力弱い凡夫として生きるものを大悲して、その如来の世界にいたる道として、如来の功德をたえた名号を選び取り、凡夫に与えてくださったのです。釈迦如来はこの世に出でたもうて、あきらかに教えを説き、雑草のように世の泥にまみれて生きるものを救おうとして、その救いを実現する道として、如来の本願を説くことを願ってくださったのであります。

真実の教

真実の教えこそ、大切なのです。世の中にはさまざまな教えがありますけれども、真実の教えによることこそ、決定的に大切なことです。

その真実の教えとは、私たちを深い迷いの中にいるものとめざませつつ、その私たちを如来の真実と呼び覚ます一言です。

その真実の教えを、親鸞聖人は『大無量寿経』であると、高らかにかけられました。そしてこの『大無量寿経』に真実の教

えを聞き、それによつて浄土真宗を開くのである、こう力をこめて聖人は「立教開宗」を宣言なさつたのです。

この『大経』は、阿弥陀如来と釈迦如来、この二尊の恩徳を説く教えである、これが聖人の基本的了解です。孤独の影をひめている凡夫を救おうとして、阿弥陀如来は本願をおこし、その本願を、この世の泥にまみれて生きる群萌の救いの道として説く、ここに釈尊の出世本懐がある。聖人のこの『大経』の了解を、私たちが仏法を学ぶ根本指針したいと思います。

如来、世に興出したまうゆえは、
ただ弥陀本願海を説かんとなり。
五濁悪時の群生海、
如来如実の言を信すべし。

〔意識〕

釈尊がこの世に出でたまうたのは、ひとえに阿弥陀如来の本願の、
広やかなお心を説こうと願ってでありました。

この世の無残さに傷つき、この世の泥にまみれて生きて、しかもそ
れを痛む人たちよ、釈尊のこの真実の教をひたむきに聞き、大悲のお
心にめざめていこうではありませんか。

如来世に出でたまう

お釈迦様とは、どんなお方でしょうか。

この世には、人が互いに傷つけ合う無残さが、途方にくれるような厳しさが、いたるところにさらけ出されています。そして全体が、言いようもなく空しいのです。だれ一人としてこの世の厳しさをまぬかれて、清らかに生きることのできる人など、居りません。だからこそ多少でも敏感な心をもった人は、そしてすこしでもこの世に生きる意味を真剣に考える人は、本当の安

らぎを、生きる力を、人生の光を、切実に求めるでしょう。

お釈迦様はこの求めに応えて、この世に来てくださったお方です。だから如来、つまり真理から来た人と仰ぐのです。そして私たちのこの切実な求めが満たされる道として、すべての人を平等に救おうと願う阿彌陀如来の本願を、説き教えてくださったのです。

このお釈迦様の教えを真剣に聞くこと、そして大悲の本願にめざめること、ここに私たちの一大事があります。